

令和6年度

福祉作文

WELFARE COMPOSITION



社会福祉法人
赤穂市社会福祉協議会

さらなる「地域共生社会」の実現にむけて



社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

理事長 児嶋佳文

私たちの生活に大きな影響を与えてきた新型コロナウイルス感染症が五類に引き下げられてから約一年六ヶ月が経過し、少しずつ日常が取り戻されています。しかし、四年以上に渡るコロナ禍の影響は大きく、人と人とのつながりの希薄化や深刻さを増した社会的孤立など、生活・福祉課題は複雑化しています。また、毎年のように大規模災害が発生していますが、地域住民の支えあいの重要性が特に注目され、地域の見守り活動や災害ボランティア活動などにも大きな期待が寄せられています。

社会福祉協議会では、地区別懇談会等を通じて市民の皆さまの声を直接お伺いしながら、人とひと、人と地域のつながりを大切にし、共感と思いやりをもって、支えあい助けあう地域づくりの支援に取り組み、誰もが住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らせる福祉のまちづくりに努めてまいります。

中でも、次世代を担う子どもたちの福祉教育の推進は特に重要であり、従来から赤穂市や学校園はもとよりボランティアの皆さんと連携を図りながら、心のふれあいと思いやりが体感できる福祉教育の推進に努めており、今後さらにそれらの取り組みを充実させてまいりますので、これまで以上のご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

本年度も福祉の問題は「地域で暮らす方の身近な課題である」ということを認識していただくため、「福祉作文」を募集しましたところ多くの作品の応募があり、いずれも心に響く作品でしたが、その中から優秀作品を選び、「赤い羽根共同募金」の配分金をもとに文集を作成いたしました。

この文集が大勢の皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、助け合い、大切にしようとする気持ちたちが社会に広がり、本市の地域福祉が向上することに少しでも役立てれば光栄です。文集の発行にあたりまして、作品を応募していただきました皆さま、ご指導、ご協力をいただきました学校関係者の皆さまに深くお礼申し上げます。

令和六年十二月

福祉作文

小学生の部

大賞	知る事	高雄小学校五年	北村蒼空	1
特選	自分のできる事	尾崎小学校六年	亀井颯士	3
入選	家ぞく	赤穂小学校三年	杉谷心嶺	5
	やさしい社会	城西小学校六年	高松実咲	7
佳作	ぼくにもできる事	赤穂小学校三年	西山誉令	8
	ニコニコえがおのひいばあば	城西小学校三年	小林蓮采	10
	おばあちゃんと楽しく話すために	塩屋小学校六年	島田真緒	12
	みんなが住みよい町にするために	赤穂西小学校六年	山田紘輝	13
	みんなが幸せになる職業	尾崎小学校六年	葛島徠笑	15
	ぼくのできる事	御崎小学校五年	和田虎臥	16

中学生の部

ぼくの身の回りには
 高齢化社会について
 私のひいおばあちゃん
 少しの気づかい

坂越小学校四年 岩元優空
 高雄小学校五年 守田雅
 有年小学校五年 遠藤朱音
 原小学校六年 松本海俐
 ……
 23 21 20 18

大賞

心がつながるその瞬間は

赤穂西中学校一年 柴原幸
 ……
 25

特選

つながりの大切さ

赤穂東中学校三年 小賀葵子
 ……
 27

入選

言葉を越えたコミュニケーション

赤穂西中学校三年 平岡ゆめ
 ……
 30

みんな幸せになるために

赤穂東中学校三年 中野創介
 ……
 32

佳作

「ありがとう」

赤穂中学校三年 旧林怜愛
 ……
 33

みんな同じ目で

赤穂西中学校一年 赤松玲那
 ……
 35

これからの私達と福祉

赤穂東中学校三年 安達萌生
 ……
 36

魔法の言葉

坂越中学校一年 岡部吏玖
 ……
 38

少子高齢化の今、私達ができること

有年中学校二年 桑原碧彩
 ……
 39

高校生以上の部

大賞	障がい	赤穂高等学校一年	蔭山瑛大	……	42
特選	幸せ	赤穂高等学校二年	山田紗羽	……	44
入選	想いやって生きる	赤穂高等学校一年	大藺かか	……	46
	介護業務と高齢者	一般	明石春夫	……	47
佳作	寄り添う	赤穂高等学校二年	川崎愛紗	……	50

※「障害」や「障害者」などの「害」の字はひらがな表記にしています。
ただし、法律名については漢字表記にしています。

小学生の部 大賞

知る事

高雄小学校五年 北村 蒼 空

ぼくのお兄ちゃんは、赤穂特別支援学校に通っています。だから、参観日や運動会や学習発表会の中には、ぼくも家族と一しょに見に行きます。

赤穂特別支援学校の様子と、ぼくの通っている高雄小学校の様子は、少しちがいます。赤穂特別支援学校の授業では、先生も子どもも、みんなの前に出て話す時は手話をしながら話しています。ぼくのお兄ちゃんも手話ができます。どうして手話を使って話すかというと、耳の聞こえない子やおしゃべりが苦手な子がいるからです。ぼくは、学校の障がい者体験学習で、3年生の時に、手話の勉強をしました。でも、もうわすれてしまっています。だから、耳の聞こえない方と話すことがむずかしいです。ぼくの

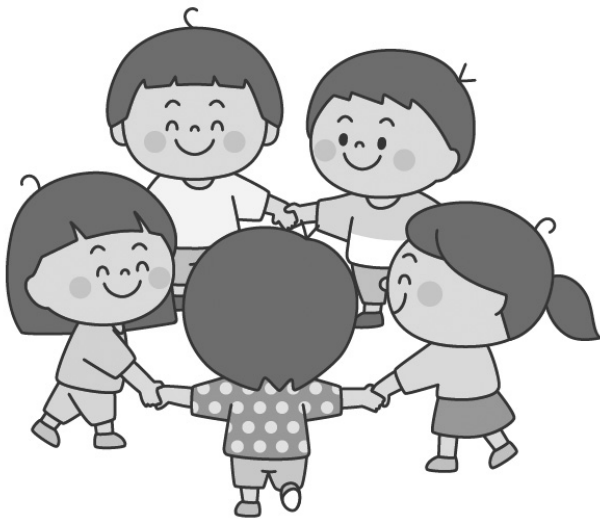
お兄ちゃんのお友達に、耳の聞こえない子がいます。お兄ちゃんは、その子と話をしたり一しょに楽しく遊ぶことができます。でもぼくはできません。色々な障がいでおしゃべりが苦手なお友達とは、お兄ちゃんは、手話やボディランゲージでおしゃべりしています。でもぼくはできません。お兄ちゃんは、どんなお友達とでもコミュニケーションがとれてすごいと思うし、うらやましいです。ぼくも、どんな障がいを持った人とも、楽しくコミュニケーションをとれるようになります。

障がいを持った方と関わることは初めはとてもドキキします。それはどうしてかと考えると、その人の障がいのことを全く知らなくて、関わり方や、方法がわからないからだと考えました。実際に支援学校でお友達がぼくに声をかけてきてくれて、どう関わったら良いのかわからなくて、困ってしまう時があります。何も言うことができず無視をしてしまつて申し訳ないという気持ちになります。そんな時お兄ちゃんはぼくに、その子が何を言っているのか教えてくれるし、わからなかったら、「もう一回

言って。」と聞き直しています。それができるのは、毎日学校で一しよに生活していて、その子のことをよく知っているからだと思いました。色んな障がいを持つている方とたくさんコミュニケーションをとるには、その人たちのことをよく知るといいうことが一番大切だと感じました。

お兄ちゃんとぼくは、ずっと一しよに生活しているので、ぼくは、お兄ちゃんのことをよく知っています。だからお兄ちゃんと関わる時に困ることはありません、特別だと思ったこともありません。でも、お兄ちゃんのことをよく知らない近所の友達が「かけ算してみ。」とか、「わり算してみ。」と、いじわるを言ってきたり、公園に一しよに行くと、「お前は病院に行つとけや。」と言ってきたりします。ぼくは、とてもはらが立って「何言つとん!!意味わからん!!」と思います。でも、それはやっぱりその言ってくる子が、お兄ちゃんのことをよく知らないからなのだと考えました。知らないから、どんな言葉をかけてどうやって一しよに遊んだら良いのかわからないのだと思いました。

障がいを持っている人も持っていない人もおたがいのことを良く知っていくことで、どんな人がどんな人も楽しく気持ち良く関わっていける社会をつくることができそうだなと思いました。だからぼくはこれからは学校での障がい者体験学習をもっと真剣に取り組んでいったり、機会があれば、障がいを持った方とどんな積極的に関わり、たくさんのかたとを知っていききたいです。



小学生の部 特選

自分でできるいっしょ

尾崎小学校六年 亀井 颯士

ぼくは、学校の委員会活動でボランティア委員会をやっています。ボランティア委員会は、みんなより少し早く学校に来て、ダンボールや牛乳パックなどの資源ゴミを回収します。前を通った人にあいさつするので頭がすっきりして気持ちがいいです。

ボランティア委員会で集めているものにペットボトルキャップがあります。ペットボトルキャップは、四百個で十円になります。一人分のポリオワクチンは二十円なので、八百個で一人の子どもがポリオワクチンを受けることができます。

ポリオは、ポリオウイルスに感染した人のうち五パーセントが全身まひなどを起こして、そのほとんどの人に後遺症が残る病気です。おじいちゃんとお

ばあちゃんは同級生にポリオの後遺症で片足がまひしている人がいたと話していました。日本では、一九六〇年に大流行したので、ワクチン接種が行われるようになり、一九八〇年を最後に野生のポリオウイルスによる感染者は出ていません。ポリオは、予防接種で大流行を防ぐことができます。

現在、野生型ポリオウイルスは、パキスタンとアフガニスタンで流行していて、感染者だけだと四十ヶ国以上の国と地域にいます。この四十ヶ国以上の国と地域のほとんどが、開発途上国です。開発途上国は、きれいな水が飲めなかったり、トイレの設備が整っていないかったりするので、ポリオに感染する確率が高くなります。

今、世界では、開発途上国を中心におよそ二千万人の乳児達が、予防接種を受けていません。ぼくはこの二千万人の乳児達が予防接種を受けられるように、もっとたくさんさんのペットボトルキャップの回収ができるようになればいいと思います。現金でぼ金するならやろうと思ったら誰でもできるけど、いらなくなったゴミを何も思わずに捨てるんじゃない

くて、地域の回収場所がいいから、ゴミを資源にすることに意味があると思いました。

ワクチンを寄付するためにはペットボトルキャップ回収以外にどんな活動があるか、この機会に調べてみることにしました。

一つ目は、『ユニセフ』です。ユニセフは、世界の子ども達の健康と幸せのためや、子どもの権利を守り、子どもがもって生まれた能力を十分にはつきできるチャンスを広げるなどの活動をしています。ユニセフのぼ金では、ポリオ以外のワクチンに三千円で九十八回分となります。

次は『古着deワクチン』です。いらなくなった服を買い取ったダンボールに詰めて、引き取ってもらい、カンボジアを中心に世界中で販売され、ワクチンが接種出来るようになっていきます。

最後は『リボンプロジェクト』です。これは捨てたい物を詰めこんで送ったものが世界中で売られ、その売り上げでワクチンが接種されます。

いろいろな活動があったけど、自分出来ることは、資源ゴミを集めることだから、自分出来ること

とを一生けん命がんばりたいです。



小学生の部 入選

家ぞく

赤穂小学校三年 杉谷心嶺

わたしは、六人兄妹の三番目です。

たまに、家で、兄妹げんかします。

よくけんかするのは、四番目の妹です。

けんかのないようは、わたしがしてあげようと思っ
てした時に、妹に、

「やめて。」

と、言われておこつて言いかえすけんかが多いです。

その時、四番目の妹がなくてお母さんが来て、お
こられました。

わたしは、いつも「なんでおこられているのかな
〜」と思いました。

お母さんに、

「自分も年上の人からおこられたらいややる。」

と言われ、わたしも前に年上の人からかわれた
事がありました。

その時、いやな気もちになったしこわかったと思
いました。

あとで、相手はそんなつもりじゃなかったと聞き
ました。

同じような事をした時は、自分かわるかつたなっ
て思っ
て妹にあやまりました。

それでも、ついついけんかしてしまつて、お母さ
んにおこられます。

ただふしぎなのは、妹がいじわるを言われていた
ら、いやな気もちになつてたすけに行つてしまふ事
です。

わたしの一番上のお兄ちゃんは、えらそうだけど
たまにやさしく遊んでくれる時があります。

とてもうれしいし楽しいです。

二番目のお姉ちゃんは、よくけんかするけど、い
つもたすけてくれて家ぞくで一番大すきです。

四番目の妹は、友だちみたいで楽しいです。

五番目の弟は、かわいくて、六番目の弟は、いや

されます。

兄妹というのは、ひまではないしなくさめてくれたり、話を聞いてくれたり、わからせてくれたり、遊んでくれたり、おかしをみんなで分けたりします。

もつと食べたいなと思う時もあるけど、たまに一人一つのおかしを買ってもらう、それがとてもうれしいです。

つまり、がまんする時もあるけどよろこびは、ばいんです。

わたしのお父さんは、ばんごはんの時、大すきなからあげがあつてたくさん食べて数がすくなくなつてしまうと、お父さんが、

「みいちゃん、パパの食べていいよ。」
と、自分が食べてなくてもくれます。

かわいそうだと思つて、

「パパ食べ。」
というけど、

「パパは大じょうぶ。みいちゃん食べ。」
と、くれます。

ばんごはんだけじゃなく、すきな食べ物で自分が

食べてなくてもいつもくれます。

みんなで食べるとおいしいです。

わたしのお母さんは、おこるととてもこわいけど、いっしょに遊んでくれたり話を聞いてくれたり、おもしろい話をしてくれたりします。

お母さんにあまえたいときがあるけど、自分からは、何ていったらいいのかわからないので、お母さんから来てほしいです。

たまに、ぎゅうとかしてくれたりするときは、心がおちつきます。

家ぞくとは、大切だしあわせです。

これからも、家ぞくみんなであらうです。
です。

やさしい社会

城西小学校六年 高松実咲

私のお母さんはかい護しせつで働いています。おじいさんやおばあさんのお昼ごはんを作ったり、準備やかたづけなどをしています。かい護しせつでは、レストランのようにごはんをもりつけて出すだけじゃなく、おじいさんやおばあさんの中には歯がよい人や食べ物飲みみにくい人、飲んでいる薬によって食べられない物がある人などがいるので、小さくおかずをきざんだり、トロミをつけたり食べたらだめな物を他の物に変えたり、ごはんを出す前に食べやすいように工夫をして出さないといけないそうです。ふつうのごはんを作るだけでもたいへんだなと思いました。

お母さんは準備とかたづけだけですが、準備ができたらかい護士さんにバトンタッチして、かい護士さんたちが食事の介助をするそうです。手の力が弱い人には食べさしてあげたり、のどにつまらないよ

うにしっかりと見守ったり、家で一人暮らしなのでごはんをさびしく食べている人も多いので「おいしそうだね」「今日はいっぱい食べれたね」など、やさしく声かけながらごはんの時間をすごしているそうです。

お母さんと話をしていて、私は「私が小さい時と一緒にだなあ」と思いました。私が赤ちゃんのころはり乳食でミキサーをしてのどにつまらないようにしてくれたり、食べさしてくれたり、少し大きくなってきても小さく切ってくれたり、私はアレルギーがあるのでたまごをのけたごはんを作ってくれたりしてくれているのを写真やビデオでみたことがあるからです。その時のきおくは無いほうが多いけれども、あたりまえじゃなくてお母さんやお父さんのやさしさで私は安心してごはんを食べたり、おおきくなつてこれたんだなっと思いました。

その人のために「どうしたら食べやすいか?」「どうしたら楽しくおいしく食べれるか?」と考えてすることは、とてもやさしく大切な仕事だなっと思いました。食べることでなくて、大人も子どもも

みんなが自分以外の人のために「どうすればよくなるかな?」「こうしたらもつとみんなが幸せになれるそうだから、こう変えてみよう!」などいろんなことを一人一人が考えていけば幸せなやさしい社会になると思います。

私は来年中学生になるので、今よりも行動する場所が増えて社会との関わりも増えます。

今まではあまり「何でだろう?」とか思わずにふつうにみのがしていたこともあったと思うので、一つ一つに感心をもっていけたらと思います。

これから世界で機械やすごい技術が開発されて、今より十年、二十年したら、今の時代では考えられないような便利な物やサービスも増えてきて、ロボットと働く時代もくると思います。もしかしたら人の仕事などもロボットがして介護や学校の仕事や家事もするようになるかもしれません。

でもやっぱり人の心がなかったら良い社会にならないと思うので、私もやさしい心づかいのできる人になりたいです。

小学生の部 佳作

ぼくにもできるじゃん

赤穂小学校三年 西山 誉 令

ぼくには、九十四才のひいばあちゃんがあります。名前は、えみちゃん。いつもにこにこしていて、やさしくておしゃべりが大すきなおばあちゃんです。ぼくがようちえんに行くとき、いつも外でまっついてくれて、ぼくが見えなくなるまで手をふつてくれていました。

「ほまちゃんはえみちゃんのたからもの。」と、いつもぼくのことをいっぱいほめてくれます。足が少しいたくてゆっくりしか歩けないえみちゃんも手をつないだり、車いすにのったりすればいっしょに旅行にもいけます。「ごめんな。おもたくなひ?」と言うけれど、ぼくは大へんだと思ったことは、一どもありません。えみちゃんとの毎日は、楽しい思い

出でいっぱいです。

ぼくが年長組のとき、大すきなえみちゃんがこうそくになってしまいました。一人で歩けなくなって、トイレにも行けなくなって、お風呂にも入れなくなって、前のように一人で生活ができなくなってしまいました。しばらくぼくのおばあちゃんの家で生活するようになりました。体の大きなえみちゃんをトイレにつれていくのは、大人二人でも大へんです。ごはんもおはしがもてないので一人で食べられません。体がいたくて夜もねむれないし、えみちゃんはまだあまりわらわなくなりませんでした。そんなえみちゃんを見て、「どうしたら元気になるんだろう。」と思い、手をにぎったり、歌ったり、話しかけたりすることしかできませんでした。

おじいちゃん、おばあちゃん、びょういんの先生、ケアマネジャーさんと話し合って、えみちゃんがかいごろう人ホームに入ることが決まりました。きつとさみしいと思ったので、毎日電話をしたり、手紙を書いたりしました。えみちゃんのたん生日には、しせつの人がテレビ電話をしてくれて、みんなでお

いわいすることができました。コロナのときだったので、手をにぎったりせなかをなでたりすることはできなかつたけれど、ガラスばりの部やで会うことができるようになり、「ほまちゃんが会いにきてくれることが一番うれしいよ。」と手をふつてくれました。少しづつ、コロナもおちついてきて、一年ぶりにえみちゃんの手をにぎることができました。ひさしぶりににぎるえみちゃんの手は、少しやせているように思ったけれど、やさしいえみちゃんのままです。今では、少しづつ、ろう人ホームの生活にもなれ、「元気になったら、おいしいものを食べにいこなあ。まっててよ。」と元気に話してくれます。

ぼくは、今まで「ふくし」という意味が分からなくて、むずかしいものだと思っていました。だから、毎年夏休みにあるふくし作文を書こうと思わなかったし、書けるわけがないと思っていました。でも、意味を調べてみると「ふくし」という漢字には、どちらにも「しあわせ」「こうふく」を意味する漢字だということを知りました。えい語にやくすと「よ

りよく生きる」という意味になるそうです。それを知ると、むずかしいものではないし、なんだかきゅうにぼくの近くにあるもののように思えるようになりました。

ぼくは、ふくし活動は大人しかできないことだと思っていたけれど、「えがおになっほしいと思いう気持ち」があればだれにでもできることだと思いました。もしかすると、ぼくがえみちゃんにしていたことも、りっぱなふくし活動になるのかもしれない。そう思うと、ぼくにもできることは、たくさんあります。じどうかんで小さい子にやさしく話しかけること、こまっっている人がいればたすけること、おじいさんやおばあさんにえがおで元氣にあいさつすること、点字ブロックがある場所にもものをおかないことなど。これからもみんながえがおになれるように、ぼくができることをえがおでやっていきたいです。

えみちゃんがこれからもえがおで元氣でいてくれますように。

ニ「ニ」こえがおのひいばあば

城西小学校三年 小林蓮 采

ぼくのお母さんのじつ家へ、遊びに行くときのことです。いつも出むかえてくれるのは、ひいばあば。ぼくのお母さんのおばあちゃんです。

「ただいま。」

と、お母さんが言ってもひいばあばはポーツとします。

「わたしやで。」

と、お母さんが名前を言うとひいばあばは、

「ああ！だれかと思った。」

と、思い出したように言います。そのときのお母さんを見ると、いつも少しさみしそうな顔をしています。

ぼくが家に入って遊んでいたら、少し前までは同じへやへ来てくれていたひいばあば。今は、ずっとひいばあばのへやに一人でいます。ひいばあばがさみしくならぬように、お母さんがひいばあばのへ

やに行つて、いつもお話ししています。ぼくがへやに行くとニコニコえがおで、

「れんとは何さいになったんかな？」

と、聞いてきます。顔を合わせると、いつも同じことを聞いてきます。だから、何回も何さいになったかを教えてあげます。そのことをお母さんに言うと、「何回も同じように答えてあげるのは、いいことやで。」

と、ほめてくれました。そのときに、ひいばあばはものをおぼえるのがむずかしくなったり、わすれんほうになっていると教えてくれました。まだ少しだけ「にんちしよう」というものになっているみたいです。このことを話すお母さんはまたさみしうで、

「いつか、わたしのこともわすれてまうんかなあ。」
と言つて、泣きそうな顔になります。

今ひいばあばは、週に一回デイサービスというところに行つてしていると聞きました。いろんな人とおしゃべりしたり、お昼ごはんをみんなまで食べているらしいです。このことは、ひいばあばといっしょに

すんでいるぼくのおばあちゃんから聞きました。

おばあちゃんは仕事をしているので、ずっと家にいることはできません。ひいばあばがこまらないように、お昼ごはんを作つてから仕事へ行つていくみたいです。まだまだ元気なおばあちゃんだけど、としをとるのでつかれないかなとしんぱいになります。

おばあちゃんとお母さんから話を聞いて、「にんちしよう」はものわすれが多くなるびょうきだと知ることができました。としをとると分らないことが多くなるのは、なんとなくそうぞうはできていました。これがびょうきで名前もついているということとはしりませんでした。

わすれんほうになったひいばあばだけど、ぼくの名前はおぼえてくれていきます。それでも、ほかのことを思い出せなくてこまるのがふえるのかな。おばあちゃんも、たいへんになつていくのかな。みんながこまったときは、ぼくがたすけてあげたいです。ぼくが今できることは、ひいばあばと会う時間をふやしてたくさんお話しすることだと思います。そし

て、ひいばあばがニコニコえがおをわすれることがないようになればうれしいです。

おばあちゃんとお楽しく話すために

塩屋小学校六年 島 田 真 緒

私には、大好きなおばあちゃんがいます。

おばあちゃんは、健康体操、かな習字や生花など、たくさんのお習い事を今も続けながら毎日の生活を楽しんでいきます。

だけど、おばあちゃんはもう八十一才なのでいろいろ大変だそうです。

私が五才のころは、よく耳が聞こえていて小さな声でこっそり話していてもおばあちゃんは全部聞こえていました。

ですが、おばあちゃんは歳をとっていくうちに、だんだんと耳が聞こえなくなっていきました。いっしょに会話をしていると、私の声が聞こえなくて、

「今なんて言った？もう一回言つて」という言葉がだんだんと増えてきました。

私はこの時に、五年生のころに高齢者体験をしたことを思い出しました。

体には、おもりなどをつけ、耳は聞こえづらくなる仕かけとしてヘッドホンをつけました。また、目は見づらくなるように特殊なメガネをかけて、学校を歩いたりしました。

この時に、友達と試みに話してみたけど、ヘッドホンをつけていたので、友達の声がボソボソという声しか聞こえませんでした。おばあちゃんも今、こんな感じなんだということがこの体験で分かりました。

このような体験をした上で、スムーズに話をするには、

〔一〕 大きな声で話す。

〔二〕 おばあちゃんが聞きとりやすいスピードにして話す。

〔三〕 聞こえなかったら、もう一度同じことを言う。ということだと思います。

まず、大きな声で話すということです。小さい声でしゃべるとおばあちゃんにとってはボソボソとか聞こえず、しゃべっている内容が分からないので大きな声でしゃべって、はっきり・きちんと話して聞こえるようにすることが良いと思いました。

だけど、どなったような大きな声で話すというわけではありません。適切な声でしゃべるようにしましょう。

つぎに、おばあちゃんが聞き取りやすいスピードにして話すということです。いつも友達と話すスピードは、かなり早口だそうです。私は気づきませんでしたがおばあちゃんから「真緒ちゃんとおばあちゃん（友達）の会話は早口すぎて、何を言っているか分からない」と言われた事がありました。このスピードでおばあちゃんと話すときと聞きとれないので、友達と話すスピードよりゆっくと話す事が心がけようと思いました。ですが、あまりにもおそすぎたりしたら反対に聞きとれないので気をつけてください。

そして、聞こえなかったら、もう一度同じことを

言うのです。これが意外とめんどくさいです。お母さんは、おばあちゃんと話す時、ここで話がとぎれることがあります。よく聞き直されてお母さんはおこっています。

わたしは、大好きなおばあちゃんといろいろな話をしたいので、この三つの事を心がけて話しています。

このような事を気をつけて話すと、会話がスムーズに進み話すことがとっても楽しくなります。

みなさんもおばあちゃんやおじいちゃんと話す時にこのようなことを心がけて、もっとお話を楽しんでみませんか？

みんなが住みよい町にするために

赤穂西小学校六年 山田 紘輝

ぼくが、家族と出かけた時に道を歩いていたら、白いつえをつきながら歩いてきた視覚障がい者の人

の顔が、険しい顔をしていました。

それは、視覚障がい者の人が歩いている道には、障がいがない人や自転車に乗った人もふつうに通っていたので、ぼくは、高れい者や障がい者の人たちは、いつも不便な生活をしているのではないかと思いました。

そこで、ぼくが実際に町の中で見たことがある障がい者を助けるものを思い出してみました。

まずは、点字ブロックがある歩道です。

他には、車いす、視覚障がい者を助けるために訓練されたもう導犬という犬や、白いつえ、ほちよう器、スロープ、音で知らせる信号機、スマートフォンなどを使って自分の伝えたい言葉を文字に変えてくれる物や、エレベーターなどがあります。

特にエレベーターの車いすマークが付いているボタンは、おしやすきように低い位置にあり、ふつうのボタンをおした時より少し長くとびらが開いているそうです。

それは、ぼくたちがふつうに生活をしていて当たり前のようにエレベーターを使っているけど、車い

すの人が安全に使えるように工夫されていることが分かりました。

他には、多目的トイレという障がいがある人だけでなく小さな赤ちゃんを連れた人や見た目では分かりにくい病気の人も、どんな人でも使いやすく工夫されているトイレがあります。

しかし、人口のおよそ7.4%の人が障がい者であることが分かりました。

その中には、見た目で分かる障がい者と、見た目では分かりにくい障がい者がいます。

しかし、地域によっては階段しかない駅や建物など、対々ができてない場所もたくさんありますが、最近では、ぼくの身近な所でもバリアフリー化が進み、障がいを持つ人や高れい者のためのサービスも多くなってきました。

ぼくは、福祉という言葉に、「幸せ」や「ゆたかさ」という意味があると知りました。

それは、ぼくたち自分自身の行動一つ一つで、高れい者や障がい者を救えるかもしれない、喜ばせられるかもしれないと思いました。

そのために、ぼくたちができることは、困っている人がいたら、やさしく声をかけることだと思います。

そして、みんなが気持ちよく、住みやすくするために、みんなが障がいがある人や高れい者を助けられるように、障がい者や高れい者について学ぶことが大切だと思います。

まだまだ分からない事は、たくさんあるけれど、ボランティアなどに参加したり、困っている人がいたら、自分から声をかけるのは勇気がいるけれど、まずは自分でできることから少しずつやってみたいと思います。

みんなが幸せになる職業

尾崎小学校六年 葛 島 徠 笑

私の祖父は、何年か前に足を悪くし歩きにくくなってしまいました。今は、祖母だけでの世話が

大変で、ヘルパーさんが通ってくれています。私の祖父の所には、ヘルパーさんが来ているけど、少子高齢化の影響で、介護士や、ヘルパーさんの人手が足りてないことを知りました。

介護士は、精神的な負荷も多く、他の職業よりも、人が少ないそうです。

介護士が少ないと、一日の一人の業務量が多くなり、離職者が増えます。すると業務量が多くなり、離職者が増える悪循環です。

このままでは、介護サービスを受けられない人が増えていくばかりです。そうになると、多くの人が、生活のしづらさを感じるでしょう。

私は、そうならないために、どうすればいいのかを、考えてみました。

サポーターや、カウンセリングなどを導入して、介護士への負荷を減らしたりすることや、社員評価制度を整えて、評価を上げて、人を寄り付きやすくさせる、という取り組みをすることで、介護士の人数が増えるのではないかと、私は思いました。

けれど、これにもデメリットがあります。そのよ

うなサービスを導入するには、税金がかかります。「これ以上税を増やすな」という声もたくさんあります。

でも、税金というのは、日本の国民のだれもが幸せに暮らすために、納められたお金です。

だれもが、経験する高齢者を、幸せにするのは、正しい税金の使い道の一つではないかと、考えています。

このようなことは、介護士だけに限らないと思います。

例えば、看護師などです。

なぜなら、病院の手伝いや、入院している患者の世話などをしているからです。

人の世話をしたり、人とつながるといのは、少しはストレスがたまることです。

そういうことをずっとつづけていると、大変になってしまいます。

そうになると、だれもが幸せになる世の中ではなくなってしまう。

年齢問わず、幸せな世にするには、全ての職が大

切です。そして、その職業を残すには、一人一人の心が大切です。

介護士というのを、知っておくだけでもいい、そして、できれば、この作文を通して、興味を持ってくれるとうれしいです。

ぼくじでみるいし

御崎小学校五年 和田 虎 臥

ぼくはすごく人見知りです。ぼくは知っている人と話すことはできるけど、知らない人と話すことや声をかけられることが苦手です。

本当は町でこまっている人を見ると助けたいと思っています。だけど声をかけることができず、いつも見守ってしまいます。

ぼくのお母さんは町でこまっている人を見るとすぐに声をかけます。

ぼくが一年生の時にお母さんと買い物に行くと雨

がふっていました。いつも通り買い物を買わせて車に乗ろうとすると、同じように買い物を買わせて車に向かうおばあちゃんが立っていました。その時とつぜんおばあちゃんがぼくとお母さんに、

「よくふるねー。もう車まで荷物を持って行けないわ。」

と、声をかけてきました。するとお母さんは

「そうですね。車どこにとめたの？かさあるから荷物いっしょに運ぼうか？」

と、言いました。おばあちゃんは、

「いやわるいね、でも助かるわ。」

といい、お母さんはぼくを車に乗せてからおばあちゃんのお手伝いに行きました。

車で待っていると、お母さんとおばあちゃんもどつてきました。よく見ると、おばあちゃんはおかさをさして、つえをついて歩いていました。そして待っていたぼくに、

「ぼく、ありがとうね。おばあちゃん帰れなくてこまっていたから助かった。これ家に帰って食べてな。」

と、みかんをくれました。帰りの車でぼくは

「もう、おそい。知らん人に話しかけんといてよ。」
と言うと、お母さんは、

「ごめんな、待っててくれてありがとう。」
と言いました。

この時のことも場所もよく覚えています。

だけど一年生のぼくは、おばあちゃんやお母さんのきもちを考えることは、できませんでした。

雨の中つえをついてまでぼくに御礼を言いにくくれたおばあちゃんに、ぼくはありがとうのたった一言さえ言えませんでした。

今すぐく後かいています。

このことをお母さんに話すと、

「その気持ちに気付けた事が大事だから、大丈夫だよ。」

と言われました。その時、今ぼくが知らない人に対して何かできていることはあるか考えてみました。

小さなことだけど、お店のエレベーターをおりる時にボタンをおして開けていると、いつも知らない人にありがとうと言ってもらっていると気付きました。

た。妹がうまれてからいつもお店でぼくがエレベーター担当になっていたので、いつもしていたことが感謝されるとすごく気持ちいいです。

これからも、どんな小さなことでもぼくにできることがあれば進んでやりたいと思います。

そしていつか、こまっている人がいたら勇気を出して声をかけられるようになりたいです。

ぼくの身の回りには

坂越小学校四年 岩 元 優 空

ぼくの家の近くには、おばあちゃんとおじいちゃんが住んでいます。

ぼくが生まれたときからずっとかわいがってくれて、家に行くとおかしをくれたり、がんばっていることをほめたりしてくれます。たくさんご飯も食べさせてくれるので、毎回行くのが楽しみです。

そんなおばあちゃんがある日入院することを知り

ました。ぼくが入院する前に行ったときは元気だったのに。心配で心配で、毎日様子を聞いていました。無事退院できたときはすぐに会いに行きました。体が動かせずにつつとねていたけど、お家に帰ってきてくれてとつてもうれしかったです。

「ぼくに何かできることない？」

と聞いてみると、小さな声でゆっくり、

「顔を見せてくれるだけでもとつてもうれしいよ。」

と言っていました。

「そんなことでもいいの？」

と言うと、小さくうなずいていました。

学校や習い事で毎日に行けなかったけど、休みの日はかならず会いに行きました。すると日に日に元気になっていったのでほっとしました。おばあちゃん、

「何回も会いに来てくれたから元気になったんだよ。」

と言ってくれます。

毎日行ってないのでもうしわけなく思ったけど、こう言ってくれたことがとつてもうれしかったです。

ぼくみたいな子どもでもできることがあるんだと思います。

おじいちゃんはぼく達のためによくお米を持って来てくれます。

「みんなが大きくなってくれるのが一番の楽しみや。」

と言ってくれます。一緒にご飯を食べているときも、

「そらくんはほんまにおいしそうに食べるな。おじ

いちゃんはそれだけで元気がでるんや。」
と言っていました。時々なみだをうかべているように見えます。

「なんでご飯を食べただけでほめられるの？」

「ご飯を食べるとみんなを元気にできるの？」

ふしぎでしたが、おじいちゃんを元気にできてよかったです。

このように、ぼく達が会いに行ったり、一緒に時間を過ごしたりすることで、おじいちゃん、おばあちゃんは元気になってくれることが分かりましたが、他にもできることはないか調べてみました。

まず大切なことはお年寄りのことをよく知ること

だそうです。お年寄りといっても、家族とくらししている人、家族を亡くして一人でくらししている、高齢者施設でくらししている人と様々です。それぞれちがったなやみや思いをかかえています。その人に合ったしえんをすることが大切です。

ぼくのおばあちゃんはデイケアセンターの人が来て、リハビリをしたり、おふるにいれたりしてくれます。このようなことは「介護」と言われるそうです。ぼくには力もないし、車の運転とかもできないので、介護のお手伝いをするのはむずかしいなと思っていました。しかし、家のドアを開けたり、つえをとってきたり、にもつを持ったりと少しの手伝いでも介護になることを知りました。

小さなお手伝いをみんなですること、お年寄りの人は幸せにくらせるそうです。おじいちゃんとおばあちゃんもぼくも楽しくすごせるように、自分ができることを考えて実行していきたいと思えます。

高齢化社会について

高雄小学校五年 守田 雅

今、高齢化社会が問題となつていますが、私には今年九十八さいになるひいおばあちゃんがいます。私の母のおじちゃんとおばちゃんと三人でくらしています。

私は時々母とひいおばあちゃんの家に行きますが、耳は遠いですがたくさんいるひ孫の名前を全員覚えてるし、足こしもじょうぶで元気にくらしています。

私は初めてひいおばあちゃんのを聞いたときはびっくりしました。

食事はおばちゃんが作っているようで、何を作っても「おいしいおいしい。」と言って出された物は残さずに食べているそうです。それが長生きのひけつなのかなと思います。

そんなひいおばあちゃんですが、七年前まで今は亡くなっているひいおじいちゃんのお世話をしてい

たようです。

ひいおじいちゃんは、一人でトイレやお風呂に行けなかったので、歩行器を使っていました。が、ひいおばあちゃんはその手助けしていました。体が大きかったひいおじいちゃんを手伝うのはとても大変だったと聞きました。

テレビのニュースで、老老かいごという言葉聞いたことがあるけれど、まさにひいおじいちゃんといひいおばあちゃんのことだったのかなと思いました。時々デイサービスの人が来てお風呂に入れてくれたりかみのけをあらってくれたりしていたので、とても助かったということを知ったこともありました。

ひいおじいちゃんにはひいおばあちゃんやおじちゃんおばちゃんが一しょに住んでいたのですが、何か困ったことがあっても手伝ってくれていたけれど、今はかいごをしてくれる人がどんどん減っていついてるといふことも問題になっています。問題はそれだけではなく、かいごをする人が高齢者をぎやくたにするという悲しいニュースもあります。私はこう

いったニュースを見て、ぎゃくたいをするならか
いごをする仕事をやめてほしいと思います。

でもぎゃくたいの原因としてもっとも多いのは、
教育・知識・かいご技術などに関する問題だそうで
す。その次に多いのは、しょく員のストレスや感情
コントロールの問題だそうで、一番少ない理由は人
員不足や人員配置の問題および関連するたぼうさで
あることが調べて分かりました。

私はこの原因の中で、一番少ない理由の人員不足
という点が気になります。

私はいごをしたことがないから、大変さは分か
らないけれど、大人の人をかいごするには体力とに
んたい力がかかりいると思うので、初めは好きで始
めた仕事かもしれないけれど、ストレスもたくさん
たまるんだらうなと思います。

これからどんどん高齢化社会になっていって、か
いごをする人もかいごされる人も高齢になっていく
けれど、みんなが安心してかいてきにごせる社会
になればいいなと思いました。

私のひいおばあちゃん

有年小学校五年 遠藤朱音

私には、ひいおばあちゃんがいます。ひいおばあ
ちゃんには、私の家族にとつて、とつても大切なそん
ざいです。でも、最近ひいおばあちゃんは少しずつ
変わってきました。お話をしても、私のことが誰だ
か分からなくなったり、昔のことばかり話すことが
増えました。それは、「認知症」という病気だとお
母さんが教えてくれました。

認知症は、年をとった人がよくかかる病気で、記
おくが悪くなったり、考える力が弱くなったりしま
す。ひいおばあちゃんは、昔は私にたくさん話を
してくれて、私が困ったときにはいつも助けてくれ
ました。でも今は、自分がどこにいるのか分からな
くなったり、私の名前を思い出せなかったりするこ
とが多くなりました。最初は私もびっくりして、ど
うしてこうなってしまったんだろうと思いました。

でも、お母さんはこう言いました。「ひいおばあ

ちゃんは病気なんだよ。だから、今まで通りに接してあげることが大事なんだよ。」それを聞いて、私はひいおばあちゃんののために何ができるかを考えました。

それから、私はひいおばあちゃんと一緒に過ごす時間を大切にしようになりました。ひいおばあちゃんが何度も同じ話をしても、私はちゃんと聞いて、うなづくようにしました。時々、ひいおばあちゃんは私を他の人と間違えることもあります。そのときは「私は朱音だよ」と優しく教えてあげます。

また、私はひいおばあちゃんと私の共通点を探しました。それは、手芸が好きなところです。ひいおばあちゃんは昔、縫製という縫い物の仕事をして、縫い物が得意です。私もフェルトでお守りを作ったり縫い物をするのが好きなので、一緒に縫い物をして、ひいおばあちゃんの笑顔がみたいです。

私がひいおばあちゃんと過ごす中で気づいたことがあります。それは、年をとった人たちは昔のように元気ではなくなってしまうけれど、それでも私たちと同じように感じたり、考えたりしているという

ことです。だから、年をとった人たちには優しく接して、助け合うことが大切なんだと思います。

私は「福祉」という言葉について調べてみました。福祉は、みんなが幸せにくらせるように助け合うことだそうです。特に、年をとった人や病気の人を支えることが福祉の一部です。私がひいおばあちゃんに会いに行くのも福祉の一つだとお母さんが言ってくれました。私は、これからもひいおばあちゃんと話をたくさんして、ひいおばあちゃんが少しでも楽しく過ごせるようにしたいと思います。

福祉は、誰かを助けることだけでなく、自分自身も成長させるものだと感じました。ひいおばあちゃんと過ごす時間を通して、私は優しさや思いやりの大切さを学びました。そして、それが家族や友達だけでなく、周りの人たちみんなに対しても同じように大切だということを知りました。

これからも私は、ひいおばあちゃんと一緒に過ごす時間を大切にし、福祉について、もっと考えていきたいと思います。そして、しょうらいはもっと多くの人たちが幸せに暮らせるように、自分にできる

ことを見つけていきたいです。

少しの気づかい

原小学校六年 松本海俐

少しの気づかいが人を幸せにします。小学生の私一人では、大きな福祉活動はできません。ひとくくりに「福祉」といってもなんだろうと思って調べてみると、「全ての人が幸せに生活するための取り組み」という意味でした。福祉活動というと、高齢者や障がい者のための活動と想像しがちで、難しいことのようなイメージになりやすいけど、みんなが幸せに生活をするための手伝いをするのだと思うと、福祉活動も行いやすいなと思えました。

私も小さなことですが、不自由を感じたことがあります。私はバレーボールをしていて、その練習中に手の指を骨折してしまいました。

指を骨折したことで、私は日常生活でささいだけ

ど多くの不自由さを感じました。利き手だったこともあり、指が一本折れただけでもギブスを付けることによって、今まで当たり前前にできていたことがスムーズにできなくなりました。

例えば、鉛筆を持って字を書くことや、教科書をめくることも難しかったです。また、給食のおぼんを運んだり、掃除の時間にほうきや雑巾を使ったりすることも、思った以上に大変でした。それまで当たり前のようにできていたことが急にできなくなるのと、とても不便で不安でした。

そんなときに、友達が気づかって重たい物を持ってくれたり、さりげなく手伝ってくれたりしたことが、とても嬉しかったです。

また、骨折したのがちょうど音楽会の時期で、太鼓やリコーダーの練習をしているときだったので、その練習も大変だったし難しかったけど、練習する姿や本番で演奏する姿を見た人から「すごいね!」っと言ってもらえたことも、とても嬉しかったです。こういった声かけだけでも、がんばってよかったなと思えました。そんな少しの気づかいや声かけがあ

るだけで、人を幸せにする力があるんだなと感じました。

これらの経験を通して、私は人の優しさや思いやりの大切さを改めて感じることができました。人が他人に対して持つ小さな気づかいや思いやりが、どれほど大きな助けになるかを実感しました。そして私自身も、怪我や障がいを持っていてる人を見かけたときには、積極的に助けてあげたり、声をかけたりしたいなと思うようになりました。たとえ小さなことでも、困っている人に手を差し伸べることで、その人の生活が少しでも楽になってくれたら私も嬉しいし、お互いにとってすごく良いことだと思いました。

私がみんなに助けってもらったように、私も誰かの力になりたいという気持ちが強くなりました。今後は、学校生活や日常生活の中で、困っている人がいれば声をかけ、私にできるサポートをしたいと思います。

この指の骨折は、私にとって大変な経験でしたが、それ以上に多くのことを学ぶ機会となりました。こ

の出来事を通して、私は福祉がどういうものなのか少し分かった気がします。これからは、日常生活の中で人に優しく接することを心がけ、思いやりの気持ちを持って過ごしていきたいと思います。



中学生の部 大賞

心がつながるその瞬間は

赤穂西中学校一年 柴原 幸

私の将来の夢は、手話通訳士になることです。

ろう者の人について調べ始めたのは、結構前のことなのですが、調べたことについてはとてもよく覚えています。

まず始めに知っておどろいたことは、デフリンピックという、ろう者のためのオリンピックがあるということでした。デフとは、耳がきこえないという意味で、デフリンピックとは、国際的なろう者のためのオリンピックなのです。そして、デフリンピックでは、耳で感じる音ではなく、目で見える光や旗などを使用しています。例えば、陸上や水泳競技では、手元に、ピストルや笛と同時に光る箱のようなものがあり、スタートを選手に伝えるのです。

デフリンピックには、補聴器なしで音を聴きとる力が55デシベル以上損失している人が参加できます。55デシベル以上損失していると、普通の声での会話が聴こえません。

音の聴こえ方で、呼び方が違うということにもおどろきました。音が聴き取りにくい人を「難聴者」、音が聴こえない人を「失聴者」「ろう者」「ろうあ者」といい、漢字では、「聾者」、「聾啞者」とかきます。聾という漢字は、耳が聴こえない。啞という漢字は、口を使う言語を話せない。という意味を表しています。

私は、早瀬憲太郎さんを知って、手話を勉強しはじめました。早瀬さんは、ろう者の方で、様々な活動をしています。ろう者の塾を経営し、ろう者向けや、ろう者をテーマとした映像製作を行っていて、自転車競技でデフリンピックの日本代表にも選ばれていました。また、私がよく読んでいる、「手話教室」という本の監修をしていました。その本のあるページに、

「手話という言葉が、君のいる世界と、僕のいる世

界を結びつけてくれる。」

という早瀬さんの言葉がのっていました。それを見て、手話を勉強して、いつかろう者の人と、自分の手話で話してみたいと思ったのです。

私は、4年生のとき、クラスメイトのお母さんに、手話を教えてもらいました。両親がろう者の方だと知ったのは、参観日のときにクラスメイトと手話をしていたのを見たからです。その前から手話を少し勉強していたので、実際に見たとき、手話だとすぐに分かり、話してみました。

実際に手話を見ると、自分が全然できていないのを実感し、もっとうまくなろうと思いました。

4年生のときに、アイマスク体験や車いす体験、高齢者体験をしました。でも、ろう者の体験をしなかったので、再現するのは難かしいと思いますが、取り入れてほしいと思います。

最近テレビで、AIの手話の映像が流れているのを見ます。手話にAIを活用することで、カメラが付いたデバイスがあれば自宅にいても手話が学べ、手話が身近な存在になるといいます。

私には、あこがれている手話通訳士の人がいます。

赤穂の幅広い地域で活動している方で、土曜夜店や義士祭などのお祭りで手話通訳をしていたり、小学校の手話教室の講師の先生としてきていたりするところを見かけることがあります。

私も、自分の手話で、誰かのために通訳をして、誰かに喜んでもらえるような、そんな手話通訳士になりたいと思いました。

世界には、国際交流の場で使われている、手話の共通語、国際手話というものがあります。それは、どの国、どの地域であってもコミュニケーションをとれるようにした手話です。私は、この国際手話を勉強して、いつか、外国から日本に来たろう者の方と、あいさつをして手話でつながってみたいです。

手話は、人と人を結びつけるものだと、早瀬さんは言っていました。私は、人の心と心をつなぐものだと思います。私にとっての手話は心をつなぐものです。なぜなら、手話でろう者の方と話したことは、通訳してもらったときしかないけれど、少しでも自分の手話を通じたときに、心がつながったような気

がしたからです。

手話は、人の心と心をつなぐもの。私が人の心をつなぐ存在になって、心と心がつながったその瞬間を自分でつくりたい。一番近くで見たい。と、そう思います。



中学生の部 特選

つながりの大切さ

赤穂東中学校三年 小賀 葵子

近年、めまぐるしく社会情勢が変化し価値観が多様化する中で、子どもたちによるいじめや暴力事件、高齢者への虐待など悲しい出来事をよく耳にするようになった。

なぜ、そのような痛ましい事件や出来事が頻繁に起こるのだろうか。

私は、時代とともに家族構成や生活意識の変化、インターネットやSNSの普及などによって、人と人との関わり合いが少なくなってきたことが原因の一つではないかと考える。

昔であれば、散歩や買い物に出ると近所の人たちと会って挨拶を交わしたり、立ち話をしたり、また、大人から子どもまで参加する学校や地域の行事など

もたくさんあったそうだ。

つまり、そのような交流が、幼児や高齢者、障がい者など異なる年齢や様々な立場の人々とのふれあいの機会を生み出していたのだ。

しかし、そのような関わり合いも時代と共にめっきり少なくなってきた。このまま人間関係の希薄化が進めば、それらの体験を通じて他者を思いやる心や協調性などを育成することは難しいと思う。

社会には、勉強が得意、不得意の人もいれば、運動が好き、嫌いな人、障がいのある人やない人、子どもや高齢者など様々な人々が存在し、共に生きている。

だからこそ私は、相手の立場に立って相手を思いやることはもちろん、コミュニケーションをきちんと図ることがお互いを認め合い、理解を深め、信頼関係を築いていく上でもとても大切だと考える。

ある時ニュースを見ていると、高齢者への虐待事件が報道されていた。福祉施設に入所していたおばあさんが、職員の男性から日常的に暴力を振るわれ

ていたのだ。

私は、このニュースを見た時、なんでこんなことをするんだらうという悲しい気持ちと、暴力は絶対に許されないという気持ちでいっぱいだったのを覚えていた。それと同時に、男性に相手を思いやる心があれば、もし二人の間に信頼関係があったなら、このような事件は起きなかつたかもしれないと色々考え込んだ。

介護という仕事は、高齢化社会が進む現在においてなくてはならない仕事だ。

社会福祉施設で働く人たちは、利用者の方々の食事やトイレ、お風呂の介助はもちろん、着替えや寝たり起きたりの準備など様々な業務をこなしながら、皆の生命や健康、生活を守っている。

私は、そんな日々の業務の中で、コミュニケーションはとても大切だということを介護の現場を経験したことがある母から聞いた。

利用者の方々との関わり合いやコミュニケーションを通じて、現在抱えているニーズや悩みなどを感じ、改善できるように、また日々の生活が楽しいも

のへとつなげていけるよう職員の方々は努力されている。利用者の方々が自分らしく生活できるように、一人ひとりを理解し、その人に合った支援を行っているのだ。

そういった関わり合いの積み重ねによって、援助を受ける人と援助をする人との間に信頼関係が生まれるんだなど、私は話を聞いていて実感した。

信頼関係を構築することは、決して容易ではない。しかし、日々の触れ合いやコミュニケーションが、相手に安心感を与え、信頼関係を築く第一歩となるなら、私たちはそれを積極的に行うべきではないだろうか。そうすれば、前述したような痛ましい事件や出来事が少しでも減るのではないかと思う。

すべての人々が、安心してゆとりや優しさを持ち、豊かな人生を送れるように、お互いが助け合い、支え合うことは、これからの社会の今日的課題と言える。

私自身も、声を掛け合うなど人と人とのつながりやコミュニケーションを大切にしながら、困っている人や悩んでいる人がいれば、誰も取り残すことが

ないようすぐに手を差し伸べることが出来る人間になりたいと思う。



言葉を越えたコミュニケーション

赤穂西中学校三年 平岡 ゆめ

家族で話しているときに、母が

「手話言語条例って知ってる？」

とみんなに聞きました。そして、職場で習ったという手話のあいさつを見せてくれました。

手話言語条例は、「手話は言語」である事をみんなが理解した上で、地域が一体となって手話を使いやすい環境をつくり、耳が聞こえない人も、聞こえない人も、そうでない人もお互いの人格と個性を尊重し合える社会の実現を目指す条例だそうです。

私の住む赤穂市にもこの条例があるということを知り、聞いて、そういえば、小学生のときに学校で手話を教えてもらった事があったなあと思ひ出しました。

小学校の中学年くらいのおきだったと思ひます

が、手話通訳の人と耳の聞こえない人が来て、自己紹介の仕方や、簡単なあいさつを教えてくださいました。自分の名前を手話でできたときはとても嬉しかったし、指の動きや表情などから友達の気持ちや伝えたい事を理解できたときは、声で伝える言葉じゃなくても会話ができるんだと思ひて感動した事を覚えています。表情や身振り手振りで素早く通訳してくれる通訳の人のこともかっこいいなと思ひました。たった一時間でしたが、とても楽しかったです。

今思ひ出してみると、普段の会話よりも、相手の手や顔を注意深く見て、伝えようとしてくれている事を理解しようとしたし、分かんたいと思ひて集中して聞いていたと思ひます。

私は、耳が聞こえるので、言葉を習得するのは周りの人の会話を聞いて自然と身につけられました。耳の聞こえない人にとって手話は学ぶための手段であり、人とコミュニケーションをとるためのツールとなります。

それなのに、なぜ手話を学ぶのは耳の聞こえない人だけなのだろうと思ひました。耳の聞こ

えない人とコミュニケーションを図るために私たちが耳の聞こえる人も手話を学ばなければコミュニケーションがとれないじゃないかと思ったのです。耳が聞こえるか聞こえないかは見た目では分かりません。私たちは話しかけて初めて相手が聞こえていない事に気づくのだと思います。その時に、聞こえないから話ではできませんというのは、とてもひどいと思うし、お互いに残念な気持ちになると思います。

私たちは、学校で英語の授業があります。英語を勉強する理由は、世界中の人とコミュニケーションができるようになるためであったり、海外のドラマや映画や音楽が楽しむことができたり、日本語が通じないところにも自信を持って出かける事ができるというような理由があると思います。

それならば、手話も言語であるので、みんなが学べる機会があればいいと思います。

でも、今の私は手話ができません。できないけれど、耳が聞こえない人がどんな事に困っているか気になって調べてみました。

まず、音が聞こえないので自転車や自動車が近づ

いても気がつかないということ、そして、聞こえていない人同士の会話に参加できないこと、病院や銀行で呼ばれても気がつかないこと、災害のときにラジオや避難指示が聞こえず適切な行動が取れないことなど、他にもたくさん不自由を感じることもあると分かりました。

しかし、不自由だからといってあきらめるのではなく、障がいのある人は、たくさん工夫しながら自分たちと変わらず生活していることにも気づきました。

私は、手話を使えるようになったら、耳が聞こえない人が感じている不便や不安を減らすお手伝いをしたいと思います。

そして、赤穂市が障がいがある人もない人も、誰もが尊重しあえるやさしい人でいっぱいのもちになればいいなあと思います。

みんな幸せになるために

赤穂東中学校三年 中野 創介

「福祉」とは何なのか。ぼくは「福祉」という言葉を聞いたり見たりした時に、はつきり何かは分かっていますでした。そこで「福祉」という言葉について調べてみると、「福祉」には「幸福」や「豊かさ」という意味がありました。「よりよく生きる」ということなのかと思いました。

ぼくは「福祉」とは障がいを持つ人や高齢の方など特定の人を対象に、そうでない人が手助けをしたりにすることだと思っていました。だから、自分には何が出来るのか何をすれば「福祉」につながるのかはつきりわかりませんでした。そして、それを行うことがとても難しいことだと思いました。

先日、ある出来事がありました。ある店に買い物に行った時のことです。店のエレベーターは、扉の幅も広く、開閉ボタンも低い位置についていました。今までこのエレベーターを見て使う人のことを

考えているんだなと思っていました。この日車椅子に乗った方が一人でエレベーターに乗ろうとしているのを見かけました。その様子を見てみると車椅子の操作がうまくいかないのか、なかなかエレベーターに乗ることができないでいました。ぼくは、いつもエレベーターに乗りませんが車椅子の方が気になって、車椅子の方が乗るまで、開くのボタンを押しました。その時車椅子の方に「ありがとう」とお礼を言われました。車椅子の方と別れた後、心が温かくなりました。

「福祉」とは何なのか。ぼくは勇気を出してエレベーターのボタンを押し、車椅子の方が少しでも出入りしやすくなるようにしただけなのに、それが良いことにつながりました。お店での経験で、今までの思いや考えが間違っていたのかと思いました。

こんな経験から自分や他の人の幸せや生き方について考えてみました。幸せやよりよい生き方は、自分と他の人を比べて良い悪いを決めるのではなく、相手の声に耳を傾けることが大事なのではないかと考えました。

中学生の部 佳作

「ありがとう」

赤穂中学校三年 旧林 怜愛

身近にはいろいろな人がいます。障がいがあったり、お腹に赤ちゃんがいても外見ではわからない方もいます。生活面や経済面でいろいろと困っている人もいます。いろいろな人がいる、そのことに気付けるようになることが大切だと思います。そして相手にとって何が必要なのかを理解することも大切です。どんな人でもよりよく生活するために周りの人ができることはたくさんあると思います。

「福祉活動」と言うとなんとなく難しいイメージで何か大きなことをしないといけないのではないかと感じてしまい、なかなか行動に移すことができません。でも、あまり難しく考えずに自分ができる小さなことであっても「福祉」よりよく生きる活動」ができると思います。みんながそのような気持ちで生活すればその輪がどんどん広がり自分も幸せに生活できると思います。そして一人一人が互いの個性を認め合い助け合って多様性の時代を共に暮らせるような世の中にしていくことが必要です。

よく自身、できることをこれからも積極的に行動に移していきたいです。

私は、高齢者の方や障がいがある方などを目にしたとき「何か手伝えることはないかな」と思うことが多々あります。困っていたりするとなおさら「助けてあげたい」と思います。ですが実際にそのような立場になると「私が一人で助けてあげられるのかな」「邪魔になってしまいかもしれない」といつも見て見ぬ振りをしてしまいます。その後、必ず何もできず後悔します。そして「無事だったかな」「なぜ何もしてあげられなかったのだろう」と思います。

夏休み前、最近のことです。朝七時半頃。私は、お母さんと弟の三人で赤穂に向かっていました。相生産業高校の前のほりまシーサイドロードにはたくさんさんの車で渋滞していました。そんな中、相生産業

高校の門の前の自動販売機で、五十代くらいの男性が倒れていました。その男性は自転車に乗っていたのです。脚が倒れた自転車の下敷きになっていて身動きが取れない状態になっていました。なので車や通行人の邪魔にならない所に車を止め、私たち三人は助けることだけを考え、男性の方へ駆けつけました。お母さんがどこが痛いかを聞くと下敷きになっていた左脚と腰が痛いと言いました。なので、脚と腰の痛みをできるだけ与えないように自転車と男性を起き上がらせました。するとその男性は、

「ありがとうございます。」

と申し訳なさそうに言いました。そして仕事場に向かっていている最中だったとので、仕事場はそこから自転車で約十分ほどの所だと言うので、お母さんは車で送りましょうかと聞きましたが、大丈夫ですと答えました。その男性が起き上がったときに手が震えていたように見えました。再び自転車に乗るときには震えているように見えなかった。私たちは安心して、気をつけてくださいと見送ることができました。そしたら笑顔で、

「本当にありがとうございます。助かりました。」
と言ってくれました。その言葉が忘れられません。
「ありがとうございます」と言ってもらえることがとても嬉しかったし、当然「ありがとうございます」と言ってもらえて嬉しくない人なんていないと思います。このような体験をしたのはこのときが初めてだったし、見て見ぬ振りをしていた私が、難しく考えず駆けつけ、助けてあげることができ、さらに感謝されることよって自分の成長を感じられました。でも、感謝されることもいいことだと思えますが「ありがとうございます」という言葉を忘れずに、どんなに小さなことでも助けてもらっていると思ったら「ありがとうございます」と言えるようになりたいです。

私は、とても人見知りです。なので人に声をかけることに勇気が必要です。そして周りの目をとめて気にしています。そのようなことが積み重なり、助けてあげること難しいのだと思いますが、助けてあげることが恥ずかしいことではないし、何もしてあげない、見て見ぬ振りをしているといつまでも成長できないことを学んだので、笑顔と「ありがとうございます」

う」という言葉を大切にし、行動できる人になりたいです。

みんな同じ目で

赤穂西中学校一年 赤松玲那

皆さんは、障がいのある人を「可哀想」と思っていますか。でもそれは違い、相手を不快にさせてしまいます。

そこで、みんなを同じ目で見ると必要があると思います。そのような事ができないと、差別になってしまいます。

皆と違うところがあっても、可哀想とは思わずに、個性だと思いたしましょう。ネガティブに捉えないようにしてください。

私の兄には、障がいがあります。発達障がいといえます。発達障がいのある人は、他人との関係づくりやコミュニケーションなどがとても苦手です。私

は、兄を苦手や可哀想だと思った事はありません。でも兄は苦労していたのを、今でも覚えています。

それは、就職と一人暮らしです。障がいがあることが理由で苦労していました。でもそれは差別だと思いません。「障がいがある」という言葉一つで判断するのは、酷いと思います。

そんな事がありました。今は兄は楽しく暮らせています。苦労しても諦めない姿は凄いです。これからも楽しく暮らしてほしいと思っています。

私はよく「あの人は普通じゃない」と聞きます。でも、人それぞれ普通は違います。自分の中の普通で勝手に違うと決めつけるのは酷いと思います。

そこで、みんなと同じ目で見ると必要があると思います。そのような事ができないと、差別になってしまいます。

この、二つの経験には共通点があると思います。それは、みんなを同じ目で見れないと差別になってしまう事です。差別がおきてしまうと、誰かが苦しんでいるしてしまいます。そうならないために、みんなを同じ目で、温かく見ましょう。

皆さんは、パラリンピックについて、どう思いますか。私は、パラリンピックに出ている人が個性を生かしているので、開催してほしいと思っています。

パリパラリンピックは、もうすぐです。二〇二四年八月二十八日（水曜日）から九月八日（日曜日）まで開催されます。私はテレビで見えて、選手を応援します。選手は苦勞して、諦めないからパラリンピックに出られるんだと思います。でも、それはオリンピックの選手も同じだと思います。つまり選手の努力は、みんな同じという事です。パラリンピックの選手は、体は不自由だけど、みんなと同じ努力をして試合に向きあっていると思います。

私は色んな選手の努力を見習おうと思いました。障がいのある人にも、みんなと同じ目で見えて差別をしないようにしましょう。

選手は、体が不自由関係なく、努力は同じだと思うし障がいのある人も、みんなと同じ努力をしているから、差別があると、人一倍の苦勞をすることに なります。

これから私は、障がいのある人が差別で苦勞しな

いために、みんなと同じ目で見えて、絶対に差別し
ません。

これからの私達と福祉

赤穂東中学校三年 安達 萌生

私はこの作文を書くまで福祉というものを詳しく知らないまま過ごしてきました。国の支出の中でも公共の福祉の費用は大きな割合を占めています。そして、これからもその額は増えていくとされ、国全体の大きな問題となっています。ここまで大きな問題なのにも関わらず、私は深く考えたことがありませんでした。そもそも福祉とはどのような意味があるのでしょうか。

福祉とは「しあわせ」や「ゆたかさ」を表す言葉です。つまり、福祉は「人を幸せにすること」、「よりよく生きること」ということであると云えます。私はこれを知って福祉という言葉がとても好きにな

りました。社会福祉の取り組みが、この社会に充分に行き届けば、誰もが幸せでゆたかな暮らしができると思います。しかし、今はそのような状況であるとは言えません。特に、高齢者福祉には問題点が多いと思います。介護でのストレスに苦しんでいる人達、一人で生活するのが難しい高齢者の方などたくさんいると思います。私はこの問題を重要視するべきだと強く感じます。

私の祖父は軽度の認知症です。母もお世話でつかれきっています。言ったことや、やったこともすべて忘れてしまいます。介護となると、とても大変なのが想像できます。もしかしたら、私の名前も覚えていないかもしれません。しかし、これで軽度なのです。より症状の重い人達がたくさんいると思います。そして、介護をしている方がいます。そのような事を考えるたびに心配になります。近年の日本は高齢化がすすみ、国民の四人に一人が六十五歳以上です。その分要介護者も増えます。それと同時に、少子化も進行しているため、介護者を担える人が減ることで近い将来に重大な高齢者福祉の問題がおき

るのだと思うと、とても不安になります。年金や医療費などが激増し、社会保障費が増加するおそれが大いにあります。だからこそ、若者である私たちがこの問題について、しっかりと考えていかなければならないのです。これからおこりうる高齢者福祉の問題が与える影響はたしかにマイナスな面が多いと思います。ですがそれを誰かのせいにしてはいけません。社会全体で考えていかなければいけないと思います。年齢関係なく、互いに支え合う。これがこれからの高齢者福祉のあり方です。祖父と接する上で気がつきました。今の社会では高齢者が住みにくい環境やしきみがあると感じます。若者ができても、高齢者が知らないことだってあります。若者が使っていないも、高齢者が分からないことだってあります。すべて高齢者に合わせることはできません。でも、それをいろいろな人が協力して支えることでできるようなことがあります。私の実体験を通して言えることです。これから貴重になるとされる若い世代の人々が支え合い、高齢者によりそっていくことがより良い福祉につながると信じています。

遠い未来ではない高齢者福祉の問題はとても深刻なものです。このままでは福祉は実現できないと思います。今、私たちにできることをするしかありません。できるだけ高齢者に住みよい社会、環境づくり、介護者も互いに支え合うということ。若い世代の私たちが意識していく必要があります。そしてそれができてはじめて、「しあわせ」であり「ゆたかさ」のある暮らしができるはずです。これがこれからの目指すべき本当の福祉だと思います。

魔法の言葉

坂越中学校一年 岡部 吏 玖

中1になって、ぼくは、はじめて、「人権」「福祉」という言葉について、何気なく、辞書で調べました。人の権利、人の幸せとのつていました。

障がい理解という内容の授業で、ぼくは今まで、感じたことのない、大変さや色んな思いを知ること

が出来たと思います。しかし、「障がい」ってなんだろうということと、身体が不自由なだけじゃなくて、心にだって障がいを持ってたくさん生活している。見た目だけでは、分からないけれど、困っている人がいるということ…。実は、ぼくの弟は、支援学級に在せきしています。弟たちはもちろん、ぼくにだって苦手なことはたくさんあります。

作文が苦手なぼくは、「作文」について母と話をした時に、なかなかイメージが出来なくて困ってしまいました。正直やりたくなかったです。でもそんな時に母が「心や身体に特性を持って産まれてくるということとは、とてつもなく大変だけど、なんかおまけがついてきたみたいでえーやん！お母さんなら幸せ感じるわ！」と、笑かしてきました。ぼくはその一言にハッとさせられました。そのことがきっかけで、少し障がいを持つ人の人権や福祉や、幸せについて考えるきっかけをくれたように思います。

ぼくは4人兄弟です。弟が3人います。ぼくや弟は、毎日ケンカをします。4人ともすごくはげしいです。大泣き声や、音がイヤになったり、耳がキー

ンとなり、困ってしまいます。どうしていいか分からなくなり、暴言をはいたり、あばれたりしてしまいます。それは、聴覚過敏というところ、調べてみて分かりました。ぼくだけじゃなくて、人それぞれ、苦手な音がたくさんあって、心がぼくはつしそうになることもあるそうです。でも他人からすると、目には見えない心の障がいのことなので、知らない人も多いと思います。ぼくはみんなとちがうというだけで、仲間はずれみたいでイヤだし、はずかしいことだと思っていたけれど、みんなとちがうという事は、当たり前で、障がいを持つことは、「苦しい」「大変」「不自由」なのかもしれないし、マイナスではあるかもしれないけれど、不幸ではない!!と思いました。だって、ぼくの周りには、ぼくを助けてくれる人がいたり、困っていると、「どうしたん?」「大丈夫?」と声をかけてくれます。そんな言葉をかけてもらった時は、何だかぼくの心はあつたかくなります。これからは、僕も積極的に、「どうしたん?」「大丈夫?」「ありがとう。」そんな魔法の言葉を大切にしていきたいと思います。

僕は最近、反抗的な態度を、お母さんやお父さんにとつてしまうので、まずは、そこからなおしたいと考えています。弟たちにもやさしく、頼られる、かっこいいお兄ちゃんになりたいです。色々な事を気をつけながら、1日1日を大切にしていきたいです。

少子高齢化の今、私達ができること

有年中学校二年 桑原碧彩

私は社会の時間やテレビで、「少子高齢化」という言葉を学んだり知りました。知った時は高齢者の割合がとて多く、びっくりしました。また、子供が少ない現状だけでも高齢者を支えていかなければならないと考えました。そう思ったきっかけは三つあります。

一つ目は私のおじいちゃんとおばあちゃんです。

おじいちゃんもおばあちゃんも八十歳をこえていて、腰や足が少し不自由です。荷物を運んだり長距離を歩いたりする時は苦しそうな表情を見せることがたまにあります。だから、荷物を運んだり手伝いをしたりすることがあります。でも毎日しているわけでは無く、自分が気付いた時や頼まれた時にしていることが多いです。何か手伝った後は、必ず、「ありがとう、助かった」

と言われます。私はこの時とてもやりがいを感じます。大体、私が手伝うことは重たいものを運ぶことです。これは私にとっても大変な事で、しようと思ってもためらう時があります。でも、感謝された時の笑顔を思い浮かべると大変さなんかすぐに飛んでしまいます。私の一番身近にいる高齢者はおじいちゃんとおばあちゃんです。一番身近にいるからこそ一番支えていかなければならないと思っています。だから率先して動いていくことが大切だと気付きました。

二つ目は病院で出会ったおじいちゃんです。私は一年生の時、捻挫をしてしまい病院に行きました。

すると車いすにのったおじいちゃんが話しかけてくれました。私はそのような事が一切なく、衝撃のあまり、少ししか話すことが出来ませんでした。あの時はびっくりという感情しかありませんでした。でも後々思い出すと、嬉しいという感情に変わりました。当たり前だけど、初めて出会ったおじいちゃんじゃべったのも初めてです。だけどあの短い時間でおじいちゃんの温かさがとても伝わったし、おじいちゃん以外にもあいさつをしてくれたり話しかけてくれる高齢者の方がたくさんいます。私はそのような温かさと優しさにあふれた高齢者の方を大事にしていきたいと思いました。

三つ目は福祉体験です。私は小学校の時、福祉体験の中でも高齢者体験というものをしました。足や腰などにおもりをつけて階段をのぼったり歩いたりしました。私の思っていた以上にとても苦しく大変でした。その辛さは何年たっても忘れないくらい非常に印象的でした。この体験を通して、少しでも高齢者が抱えているしんどさや苦しさを軽くするためには周りの環境を整えることも大切だけどすぐに動

ける私達がそばでサポートして支えていくことが一番の解決策ではないのかと思いました。

これらの私が経験したことから、まず高齢者の方を大切にすることというのが一番大事だと思いました。高齢者の方の思いを全く考えていないと残念な社会になると思うし、快適に過ごすには一人の力だけでは絶対に無理だと思うので、私の力だけではできないことが限られてくるけれど、みんなが協力すればできることも広がるはずです。

そして、私が高齢者になったと考えた時に誰かはそばにいてほしいと思うし、自由に動けることが少ない分、安心して暮らせる社会だったら良いなと思います。私が思っている事は高齢者の方の中で同じ事を思っている人は少なくはないはずです。

そのような社会になるように、私達にとっても高齢者の方にとっても、暮らしやすい環境にすることが大切だと思います。

これからは自分ができることを常に考えて過ごしていきたいと思うし、思いやりの心をもって、となくで高齢者の方を支えていければ良いなと思います。

す。また人を支えることは高齢者の方に限らず、誰に対しても思いやりの心をもちたいし、みんなで協力して少しずつ安心して快適に過ごせる社会を築いていきたいです。



高校生以上の部 大賞

障がい

赤穂高等学校一年 蔭山瑛大

障がい者とは？辞書で調べてみました。心身の機能の障がいがある者であって、障がい及び社会的障壁により継続的に日常生活または社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。

僕が、身体障がいについて、体験をしたり話を聞いたりしたのは、小学四年生の時の福祉体験が初めてでした。その福祉体験では、視覚障がい・点字・手話・肢体不自由の中から二つ体験を選ぶことができました。僕は視覚障がいと手話を選択しました。まず、視覚障がいでは、実際にアイマスクをして前が見えない状態で廊下を歩いたり階段を昇り降りする体験をしました。横に親が付いてくれていて、「段があるよ!!」とか「少し下り坂だよ!!」と声をかけ

てくれます。普段何気なく歩いている廊下が、こんなに段差があったり勾配があるのかと驚きました。階段も、一段一段足で確認しながら、そーっと昇り降りすることしかできませんでした。「これで最後の一段だよ!!」と声をかけてもらっても、何度も自分の足で確認し、足を出したことを覚えていきます。アイマスクを外した時にほっとした気持ちになりました。そのあと、視覚障がい者の方から、駅や道路の視覚障がい者誘導用ブロックについて話を聞きました。そこに僕たちが何気なく立っていたり自転車を置いてしまっていたら、視覚障がい者の方はそのブロックの上を歩くのでぶつかってしまつて危ないそうです。それまで、黄色いブロックが何のためにあるのか知らなかった僕は、今度から気を付けなければいけないと思いました。あと、町でもし一人で歩いている視覚障がい者の方を見かけたら、「お手伝いしましょうか?」と声をかけてもらえたら嬉しいとの話も聞きました。「肘を持ってください」と軽く肘の上を持ってもらいゆっくりと誘導したらいいそうです。まだ僕は町で出会ったことはありません。

せんが、いつかこの体験を生かし、積極的に声をかけ、お手伝いができるように、頑張りたいです。

手話の体験ではこの手話は何と言っているでしょうとクイズ形式で説明してくださいました。そのクイズは、動物などを表すものだったので答えることができました。でも実際の手話での会話をみせてもらったら、早い手の動きで、全く何を話しているかわかりませんでした。聴覚障がい者の方のお話も聞くことができませんでした。電話がなくても、玄関のチャイムが鳴っても聞こえないため、ピカピカと光でわかるようにしていること。最近、メールなど連絡を取るができるため、すごく助かっていることなど話してくださいました。

手話ができない僕がなにか伝えたいときは、紙に書いて伝える筆談という方法があるそうです。僕のお母さんが勤めている病院でも、耳の遠い患者さんと話をするときは紙に書いて伝えていと教えてくれました。他にも、読話といって口の動きで言葉を読む方法もあるそうです。でも、以前新型コロナウイルス感染症予防のためにみんながマスクをしている

と、口の動きを読むことができず困っているというニュースを見たことがあります。そして、その問題を解決するために洗える透明マスクというものが発売されたそうです。このマスクだと、口の動きも読めるし表情も見えると活用が期待されているとのこと。聴覚障がい者の方の悩みがこれで改善できるといいなと思いました。

僕のいたところは高校に入学し、聴覚障がい者の友達と出会い、その友達とコミュニケーションが取りたい!!と思い、手話を必死に覚えたそうです。そしてそのいとこの両親も娘の力になれば…と、手話を習いに行き始め、とても楽しいと言っていました。僕に何ができるかはわからないけれど、障がいをもつ方が住みやすい社会になるように思いやりの心を大切にしたいと思います。

高校生以上の部 特選

幸せ

赤穂高等学校二年 山田 紗羽

私の家族にはだんだん視野が狭くなっていき、最終的には全く見えなくなる

「網膜色素変性症」

という難病になってしまった家族が居ます。

難病にかかるまでは仕事したり、買い物へ行ったり、散歩をしていました。目が見えている時は一緒に絵を描いていました。

しかし、一緒に絵を描いていると違和感がありました。私は当時3歳でしたが鮮明に覚えていました。蝶々ととんぼを描くのが好きでよく描いていました。その日もいつも通り描いていると羽がずれていたり触角が離れていました。すると、「だんだん視野が狭くなってきた。」

そこからは負担にならないように絵を描くのは辞めました。幼いながらも事の重大さは理解していましたがとてもショックでした。

私が4歳の時には全く見えなくなっていました。

5歳の時、弟が誕生しました。しかし、私が4歳の時には全く見えていなかったもので、弟の顔は一度も見れていません。私の顔も、3、4歳で記憶が止まっているので、今の成長した姿も見てほしいですが、弟を一度も見られていないのが一番悔しいです。

弟が離乳食を食べられるようになった頃、私もお手伝いで離乳食を食べさせていました。すると私は目の見えない家族の手を持ち、一緒に離乳食をあげていたそうです。その時、目から涙があふれていたと聞きました。それを聞いた私はより一層

「顔を見せてあげたい。」

そう思いましたが十二年経った今も、その願いは叶っていません。

科学が発展し、目が見えやすくなる薬や手術が出てきました。薬を服用している時期がありました。その時、

「なんか光が見えたかも。」

私はその言葉を聞いて泣きそうでした。やっと目が見えるかもしれない、顔が見れるかもしれない。しかし光が見えたのはほんの一瞬でした。

でも網膜色素変性症になってしまった家族は私たちの前で弱音を吐いたことがあります。なぜ弱音を吐かないのか聞いたところ

「弱音を吐いても目が見えるようになるわけではないし、私には大好きでいっぱいお話できる家族がいるからそれだけで幸せかな。」

私はこの言葉を聞いて

「沢山お話をして思い出を増やし幸せにしよう。」

そう決め、ネガティブな事は考えないようにしました。

最初にも言ったように私には目の見えない家族が居ます。成長を目で見れなかったり、写真が見れなかったり、かわいい服が見れなかったりと辛い事が沢山です。ですが、言葉で事細かく説明すると顔がだんだん笑顔になっていきうれしそうな表情になります。それを見る度に私もうれしく、幸せな気持ち

になります。

目が不自由でも人生は楽しめるし、幸せです。しかし、科学が今よりも、もっと発展し目の視力が回復する手術が出てきたり、目が見えるようになる手術が出てくれば人生はもっと楽しくなるし、幸せになる人が増えるのではないかなと思います。

五体満足だから「幸せ」とは限らないと思います。どこかが不自由でも、本人が幸せだと思える事が、なによりの幸せだと思いました。



想いやって生きる

赤穂高等学校一年 大 菌 か か

今、日本の課題として取り上げられるものに「高齢化社会」があります。高齢化社会とは、高齢化率が七パーセントを超えた社会を指します。昨年の日本の高齢化率は二十九・一パーセントと七パーセントを大きく上回り、つまり、日本が非常に高齢化社会であることを表しています。そしてこれはこれからも上昇していくと言われていて、私たちの生活にも大きく関わってきます。たとえば介護です。

私の母は介護士、そして父はケアマネジャーの仕事をしています。介護施設の利用者の老人の方には、体が不自由な方や認知症の方など、さまざまな人がいて、日々忙しそうな両親を見ていると介護は決して楽なことではないのが伝わってきます。それが在

宅介護なら尚更で、家事や仕事をしながらも介護をするというのはとても大変なことだと思います。介護をする相手が家族だったとしても日々、疲れやストレスは蓄積していくでしょう。そこで私は二つのことを想像してみました。一つ目は、今私の家族の一人が事故に遭い、私が介護をする状況になったら、ということですか。そうなれば私の生活は大きく変わるでしょう。自分の生活、+aでもう一人のことを支えていく、というのは私が想像していることよりはるかに大変なことだと感じます。そして二つ目は、逆に私が介護される側になったらということ。体がうまく動かなくなる、今までできていたことができなくなるといふのはとても苦しく、悲しいことだと思います。そして私なら、介護をしていくれている相手に申し訳ない、という思いが生まれ、とても明るい気持ちで介護を受けることはできないでしょう。

この二つの状況を考えると、介護する側もされる側も、抱える思いは多くあり、どちらも否定することはできないものだなと感じます。だからこそ、高

齡化社会が進む今、お互いがお互いを思いやることが大切だなと思いました。そして介護の他にも私たちが関わってることがあります。日本では今、高齢化の他にも少子化が進んでいます。ということは、今五人で一人の高齢者を支えているのだとしたら、四人に一人、三人に一人：と、将来今より少ない人数で一人の高齢者を支えていかなければならないということなのです。

そのような状態が続くのであれば、私が高齢者になった時、貰える年金は今より少ないものになっているかもしれない。

そのことを考えると、若いうちからの貯金や貯蓄、健康に気を使った生活が大切になってくるなど感じました。

たとえばそうでなくてもそういった生活は大切です。誰かのせいと指をさすのではなく、まず自分ができること、少しでも始められることからしていくことで、人々がそれぞれを思いやれる温かい世界になっていけばいいなと思いました。私自身も今まで見れていなかった問題などにも目を向けて、自分が

できることを見つけていきたいです。そして誰もが幸せに生きられる環境になっていけばなと思います。

介護業務と高齢者

一般 明石 春夫

私が東有年にある高齢者施設「千種の苑」に勤務して約七年になる。

就職時に福祉業界での勤務経験はなかった。

また、特に志があった訳でもなかった。

当初、居宅支援課の管理職として入職したが、最初の二ヶ月は「現場を知ってもらおう」ということで、デイサービスセンターと地域密着型のユニット棟において他の介護職員たちと一緒に介護業務を行った。

デイサービスでは、入浴や排せつの介助やレクの世話が仕事のメインであった。同僚の介護職員たちがテキパキと業務を遂行する中、それを見ながら付

いて行くのが精一杯であった。

「果たして自分は役に立っているのだろうか。」
と自問することが多かった。

七月中旬のある日、佐用町のひまわり畑を見物に行く行事があった。そしてバスに乗る際、写真係としてデジカメを渡された。

写真撮影に自信がある方ではなかったが、指名されたので引き受けて、行った先で利用者の皆さんの表情や風景をいろいろ写した。

佐用町から帰ってきてからの約一時間、帰宅の送迎までの間に画像をプリントアウトして、利用者の皆さんの連絡帳にそれぞれ本人が写っている写真を貼りつけた。

多くの方が、そのページを見て嬉しそうに微笑んでいた。

「ああ自分も役に立ってるんだ。」

そう実感して、こちらまで嬉しくなり、そして自信を持つことができた。

デイサービスで約一ヶ月働いてから、次に地域密着型の施設で介護業務を行った。

こちらの施設の入所者は、デイサービスの利用者よりも介護度が大きい方が殆んどであり、安心・安全の面ではそれまで以上に気をつかった。

ここでもいろいろな体験をするのだが、その一つとして花火の行事があった。

八月の夜に、建物の外で線香花火などの比較的安全な花火を入所者と職員が一緒に楽しむ行事である。その時に、同じ経営母体が運営している特別養護老人ホーム（特養）の入所者も二、三人参加しており、Mさんという高齢男性もおられた。

その日は皆で一緒に花火遊びを楽しんだだけなのだが、この関わりが、後の大きな経験につながる。

二ヶ月間の現場体験を経て、私は居宅支援課長の職務を行い、その後総務課勤務となり事務所詰めとなった。

一階の事務所での仕事メインであるが、時々用事で二階の特養に行くこともある。

そんな時に、遠くにMさんがいるのを見つけては「あの人と花火をしたなあ。」と思いついたりしていた。

そのMさんが、私が入職してから三、四年後に亡くなられた。

高齢者施設にとって入所者のご逝去は避けては通れない事柄であり、私も特養の入所者が亡くなられる度に、そのご逝去を悼んでいたのだが、Mさんが亡くなった時は特に悲しかった。

たった一度、一緒に花火を楽しんだだけの関わりである。それでも悲しくて仕方がなかった。

私は平素、介護職員の十分の一も入所者とは接していない。しかし、この業界に身を置く者として、入所者との関わりはとても大切であると強く思った。

そして、時々省みるのは、「人の最期」に慣れてしまわないかと注意している。

人生の先輩の最期を厳粛に受け止めなければならぬと心掛けている。

最後に、広く世間に訴えたいことがある。「介護の仕事にもっと目を向けてほしい。」という事である。そして、その最前線で働いている介護職員の「給与などの処遇を業界全体として向上させてほしい。」

と強く思っている。

心身共にハードな仕事であるにも関わらず、この業界の給与、特に介護職員の給与は低いのではないかと思う。

介護報酬の引き上げや処遇改善手当の実施などで、少しずつ良化はしてきているが、この流れをもっと大きくしていかなければならないと思い、期待している。

私自身、五年前に父を、今年六月には母を見送ったが、それぞれ晩年は介護職の方に大へんお世話になった。超高齢化社会を迎えようとしている現在、誰もが介護から目をそらすことはできない状況が来ている。

私は今六十三歳。定年を過ぎてからも嘱託の職員として働いているが、もう少しだけこの業界で頑張るつもりである。

高齢者を敬い、共生することを目標に、頑張っていきたい。

高校生以上の部 佳作

寄り添う

赤穂高等学校二年 川崎 愛紗

この春、おばあちゃんが左手首を骨折してしまいました。何回も病院に通って、今まで当たり前にできていたことが当たり前にできなくなり、いろいろと困ったことがでてきました。

一つ目は、いつもだと一人で服を着られるのができなくなったことです。左手首に包帯を巻いているので左手を使うことはできず、右手しか使えないので一人で着替えをするのは困難でした。二つ目は、お皿を両手で持つことができなかつたので、片手でご飯を食べていたことです。三つ目は、お風呂に一人で入ることができなかつたことです。

おばあちゃんは、もっと困つたのではないかなと思つて、おばあちゃんにインタビューをしてみました

た。すると、たくさんできてきました。まず、左手が使えないので一人でできないことが増えて不便なことがたくさん増えたそうです。次に、一人ではできないことはお母さんや私に手伝ってもらわないといけなかつたので、申し訳ない気持ちがあつたそうです。しかし、おばあちゃんはいつも私とお母さんに「迷惑かけてごめんね。ありがとう。」と言つてくれていました。そして、片手が使えないので不安な気持ちになつたり、いらいらしたりしたそうです。

でも、おばあちゃんは病院に通つていて看護師の人と仲良くなつたり、他の通院している人とも仲良くなつたりして悪いことばかりでは無いと言つていました。

おばあちゃんは、片手が使えないことでたくさん不安になつていたし、私たち家族も、たくさん困ることがありました。そこで、私は、どうしたら世の中の人みんなが幸せに過ごすことができるのかを考えました。一番大切な事は、困っている人を見かけたらみんなが寄り添ってあげることだと思ひました。助け合う気持ちを持つて思ひやることでみんな

が幸せになると思います。

今回私は、身近な人を助けて相手の気持ちを知ることができました。誰かを助けることで感謝の気持ちが返ってくると嬉しかったです。これから、町中で困っている人を見かけたら積極的に声をかけて助けてあげたいと思いました。



この冊子は、共同募金の配分金で
製本いたしました。

ご意見、ご感想等ございましたら下記までご連絡下さい。

〒678-0232 赤穂市中広267

赤穂市社会福祉協議会(総合福祉会館内)

TEL(0791)42-1397/FAX(0791)45-2444

E-mail ako-shakyo@ako-shakyo.jp

福 祉 作 文

令和6年12月発行

編集・発行：社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

